

子どもたちの思いに応えられる教師に!!

2 学期がスタートして 1 か月。子どもたちには学校生活のリズムが戻ってきた頃かと思います。1 学期に予定されていた修学旅行や宿泊学習、運動会などが 2 学期に移動した学校も多く、子どもたちにも活気が出てきているのではないのでしょうか。先生方は、いつ終わりが来るのかもわからないコロナ禍との戦いに心を砕き、今できることに精一杯取り組んでいるものと推察します。私たち大人は、一生懸命頑張っている子どもたち、様々な制限の中でも笑顔を見せてくれる子どもたち、の思いに応えなくてはなりません。

授業の基盤は、「学級経営」

「授業で子どもは育つ」「授業の中で集団は育つ」とよく言われますが、その授業の基盤は「学級経営」です。少人数の学級でも大人数の学級でも様々な個性を持った子どもたちで学級が成り立っていることに変わりはありません。一人一人の子どもたちに目を向け、声をかけ、気かけながら、教師と子どもたちの信頼関係を築いていきたいものです。



子どもたちが、一人残らず目を輝かせ、夢中になって取り組んでいる授業を思い浮かべてみてください。先生方もきっと授業が楽しくなるはずです。真剣なまなざし、そして笑顔のある学級づくりを期待します。

学級の風土を支持的風土に作り上げる。

- 自己肯定感がもてる。
- 認め合える。
- 安心して自分のよさを発揮できる場や雰囲気をつくる。
- 失敗や間違いが気持ちよく受け入れられる環境をつくる。

授業での教師の役割はコーディネート

- コーディネートする視点
 - ・ 受容的、共感的な態度
 - ・ 見る 見取る 引き出す
 - ・ ほめる 価値付ける
 - ・ つなげる 広げる 深める
 - ・ 普段目立たない子も生かす

授業力向上の 5 か条

書店には多くの研究論文、実践紹介、参考書などの教育書が並んでいます。共感できる物もあればそうでないものも・・・。

ある校長先生の教を紹介しませす。

- 1 「一問一答」形式の授業は「やらない」と肝に銘じよう。
 - ・ できる子中心の授業は、わからない子にとって、つらくていたたまれない授業である。
- 2 発問・指示は短く。
 - ・ 必要感のある、価値ある発問・指示をする。
- 3 教師の話す時間は短ければ短いほど良い。
 - ・ 話（説明）が長いと子どもは「思考停止状態」になってしまう。
- 4 思考させる場面を必ず入れる。
 - ・ 子どもに思考力をつけるのが、授業とすること。
 - ・ 方法は、変化をつけて繰り返し行う。
- 5 わくわく感や脳への刺激がある授業を!
 - ・ 「揺さぶり・突っ込み・切り返し・挑発・励まし」のある授業を。
 - ・ 短いほめ言葉や励ましの言葉をたくさんストックし、子どもを笑顔で心からほめよう。
 - ・ 子どもを真に変容させるのは、心から「励まして、励まし抜く」教師の姿勢である。

.....

共感できたら早速、実践。何度も繰り返し、研鑽に努めましょう。

第1回 授業づくり研修会から

令和2年度第1回授業づくり研修会が須賀川市立第二中学校において行われました。講師には昨年に引き続き佐藤学先生をお招きしました。各学校において研修を推進する立場の先生方も参加され、大変暑い中でしたが、このコロナ禍の中での教育について研修することができました。

授業参観から

- ・第1学年 社会科
- ・单元名 古代国家の歩みと東アジア世界
- ・指導者 榊原 純子 教諭

授業は感染症対策として広い体育館で行われました。中学校に入学して半年の子どもたちですが、榊原先生とともに意欲的に取り組んでいました。

猛暑の中、友達の話聞き逃すまいと最後まで集中力を切らさず、取り組む姿に中学生らしさを感じました。

◎つぶやきとささやきのある

授業をめざす。

- ・話し合いにしない。話し合いが活発であれば<いい授業>と勘違いしてしまうが、そこに学びは成立していない。



◎社会科の資料やデータ

・社会科は「資料」と「課題」が特に重要である。だからこそ生徒の実態や目標を考慮し、内容や難易度をよく考えて選定することが求められる。



授業参観後には参観された先生方を交えて研究協議会が行われました。授業から気づいたことをもとに日頃の実践について振り返り、意見交換をすることができました。小学校、中学校の垣根を越え、「子どもの見取り方」について真剣に話し合う姿が見られました。

探究と協同の創造 — 一人も独りにしない学びの保障 — 佐藤学先生講話から

新型コロナウイルスの世界的な感染によって半年も社会が機能不全になったのは人類史上初めてのことで、だれも予想できなかったことでした。首都圏では、精神的なストレスと不安を抱え、無気力と荒れとして出現してきているそうです。こんな時だからこそ私たちは「学びの専門家」として子どもたちの学びの権利を保障していかなければなりません。

<探究と協同について>

- 探究と協同のある「主体的・対話的で深い学び」は、このコロナ禍の中でも流れは止まっていない。グループでの学びを入れていない教室はない。
- 学校は、子どもは当然のことだが教師が学び合うところでもあり、授業はデザインとリフレクションである。

<21世紀型の学びについて>

- 「口と手」で仕事をしていた【教える専門家】から「目と耳（と頭）」で仕事をする【学びの専門家】へ。
- 学びをデザインし、子どもたちと教材をコーディネートし、学びを省察する教師へ。優れた授業では、教師は、ほとんど話さないし、黒板には書かない。
- 最も大切なことは、「子どもたちを信頼し、尊敬すること」である。そして、学び続ける教師だけが、教師という仕事の幸福を享受できるということである。

《参加された先生方は、自校での伝講をお願いします。》

